

が「他者としての子ども」をモチーフの中心におこうとする創作態度」による作品群で、岡田淳、芝田勝茂、村中李衣、最上一平らの名をあげた。

そして、九〇年代である。ここではその三つの路線、傾向が新たな展開を見せながら、さらに一つ二つ、新たな路線が加わることになる。

2

まずは、エンターテインメントの路線である。大きく言ってしまうと、九〇年代（特に後半）は、「ズッコケ三人組」から「青い鳥文庫」への移行期ということができ、後者のトップランナーとしてあげられるのがはやみねかおるだろう。僕は現在三つの大学で児童文学を講じているが、毎年「子どもの頃親しんだ本」というアンケートをとっている。絵本は別として、日本の読み物としては、数年前まではやはり「ズッコケ三人組」が多かった（それに拮抗して「わかったさん」「こまったさん」のシリーズも多かった）。ここ数年は「ズッコケ」と青い鳥文庫が並ぶ感じになり、この一、二年でそれが逆転しつつある。青い鳥文庫の代表は、やはり、はやみねかおるの「名探偵夢水清志郎事件ノート」シリーズ（他には、松原秀行の「パソコン通信探偵団事件ノート」シリーズなど）である。今の大学生が生まれたのは九〇年代前半、「名探偵夢水清志郎」シリ

ーズが開始されたのは九四年で、彼らが小学校高学年になる頃には十巻前後になっていたから、シリーズとして楽しむには十分な揃えになっていた。もちろん「ズッコケ」もまだまだ人気を保っていたが、本屋に行くと青い鳥文庫がズラリというのは、この頃からの光景だろうか。

「ズッコケ」と「夢水清志郎」を比較して言えば、後者はつまりは「本格推理」の子ども版である（注1）。厳密な規定としては少し違うかも知れないが、社会派推理が事件や人物の（社会現実に対応した）リアリティを問題にするのに対して、本格推理というのは舞台装置は作りものであることを前提にしつつ、その中の事件の意外性や謎解きのおもしろさで勝負する。前回、僕は「ズッコケ」の基本的特徴について「シミュレーション小説」と規定したが、そのシミュレーションはやはりどこかで現実社会に還元されていく、あるいは現実の子ども像に重なっていくベクトルを持っている。その点、「夢水清志郎」の世界は、亜衣、真衣、美衣という三つ子の姉妹に、正体不明の「名探偵」夢水清志郎という設定自体、「本当らしさ」と訣別した設定と言える。言い方を変えれば、本来的な児童文学（という言い方も微妙だが）とエンターテインメントとの「中間小説」的な存在ともいえる「ズッコケ」から、この時期にいたって、いよいよ本来的なエンターテインメント（これもまた微妙だが）にシフトしていったと、一応括っておけ